

5

CREATIVE

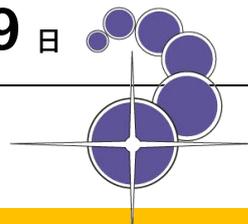
学年日より

第13号 令和2年6月19日

県立村上中等教育学校（15期生）

●探究学習、スタート！

Keep Distance



私の恩師はマニアな方ばかりです。「現在進行形が何なのか」を知るために、何百年分もの文献を調査する先生。一方、ある文豪の原作がどう翻訳されているかを調べるために世界各地を飛び回る先生。学生のころ、そんな教授らの姿を拝見し、正直、思っていました。

そんなことが、いったい、何の役に立つのか

でも、後日、国際関係論の先生が教えてくださったのです。

今だに世界が平和になっていない。それは人々の中にある誤解や無知が一因だ。分野やテーマが何であれ、君たちが勉強し研究すれば、客観性がひとつ増える。そしてそれが世界平和の一助になる。

社会人となり、私自身、一つの分野にこだわらず、むしろそれとは関係のない分野や領域の理論やアイデアを取り入れる大切さを認識するようになりました。

この数か月、世界は文字通り「VUCA（ブーカ：先行き不透明）」です。人類に貢献すべきは研究者だけではなく、私たちひとりひとりである時代がきたといえるでしょう。今、全国の高校で「探究活動」が開始されたのも、うなずけますし、一方、大学入試にもこの時代背景が反映されていることは十分納得できます。そこで、

本校でも、みなさん（15期生）から、探究活動を始めることになりました。

「探究学習」とは、具体的には、「自分で課題を設定」し、その解決を目指し、「調査や文献研究」を行い、情報を「整理、分析」し、最後に論文やポスターなどを通じ「発表」する学習です。その成果は入試出願時にポートフォリオや自己推薦文などに反映させていきます。ただ、その成果はそれにとどまらず、あなた自身の一生の財産となるでしょう。

それは誰かが出した答えにたどりつくのではなく、皆さん自身が、答えや結論を出す学習です。

正直、本校では初めてのこと。私もどこまでできるかわかりません。しかし、学年の先生方のお力ぞえをいただき、各校の実践なども参考にさせていただきながら、皆さんの「財産づくり」のために、私たちも一緒に、この世界に生きる社会の一員として、ともに考えていきたいと思えます。

●活動予定●

6・7月ごろ	自己分析・新書読書・テーマ決定の準備活動
8月ごろ	テーマ決定・ゼミ担当職員決定
9月ごろ	ゼミ開始
11月ごろ	中間発表会
4月ごろ	論文執筆開始
7月ごろ	研究発表会



なお、この学年だよりも、皆さんの探究学習の一助にしてほしいという願いから、学年団の先生方にも執筆していただくこととしました。学校は多彩な考えや価値観に触れることのできるかけがえのない場所です。ただ今年はコロナウイルスの影響もあり、学年全体で学習する場面がどうしても制限されます。ぜひ先生方の記事に触れることで、皆さんの感性を磨いていただけたらと考えています。（水戸）

時代はVUCA。
だからこそ君たちの力を発揮させよう！

学年リレーエッセイ、はじめました



初回は丸山先生！

自分を好きでいよう

丸山 敦子

高校生の頃、私は下宿生だった。入学式の午後、父親に下宿に連れて行かれて、私の高校生活は始まった。十五歳の私にとって、親元を離れて暮らす生活は思っていた以上に厳しく、ホームシックを克服するのに三ヶ月もかかった。それでも親に迷惑をかけないように、とにかく自分でできることは何でも一人でやろうと心に決めていた。勉強は頑張っていた。部活動も楽しかった。友達はみな魅力的な人ばかりで、自分もこうありたいと思えた。そういう意味では充実していたといえる。しかし、将来に対する漠然とした不安はいつもどこかにあった。うまくいかないことが重なると、できないことが歯がゆくて、自分を責めてばかりいた。話をする家族はそばにいない。夜はいつもひとりだった。

体は正直だ。不安定な気持ちからか、けがや病気を繰り返すようになった。合宿中に救急車で運ばれたこともあった。欠席が増えていく。少しぐらい具合が悪くても誰にも言えず、我慢して悪化し、余計に治療が長引いた。担任の先生が心配して声をかけてくれたが、自分ではどうにもならなかった。たまに家に帰っても、苛立ちの矛先を親に向けてしまう。わかっているのに。下宿に戻るときに持って行くようにと母から手渡された弁当箱を、玄関先に叩きつけたことがあった。その時、母は何も言わず、私を責めることもしなかったが、あの時の母の悲しい顔を、私はこれまで忘れたことはない。たった一度であっても、こらえきれない感情で母を傷つけたのは事実だ。本当に情けなくて涙があふれた。そんな自分が嫌いだった。

毎日学校へ来ること。当たり前のように、実はとても難しい。大人になってからは、体調を崩して仕事を休むことはなくなったが、あの頃の自分を思うと切なくなる。今の高校生にも同じような思いを抱えた人がいるかもしれない。食事や睡眠が足りるのと同じくらいに、どんな人にも心が満たされる時間が必要だ。それがなければ波立った心は、自分を責め、他人を傷つけてしま

う。心と体は切り離せない。「大丈夫か」といつも自分に問いかけ、時には誰かの言葉に支えられ、落ち着いた気持ちを保つことが意味のある生活を送る大前提だ。新しいことを学び合えた喜び。友達とささいなことで笑い合える瞬間や、部活動の仲間とともに味わう達成感。その場に自分がないことはとても残念だ。日常のすべてが大切なはずなのに。

あの頃の私にはそれが難しい時期があった。様々なことで失敗を繰り返し、何度も泣いた。見かねた父がくれた手紙にこうあった。

「誰にでも、その人だけがもつ良さがある。他の誰とも同じでない要素だ。お前のそれは何であるかと自分自身に問うてみればいい。自分の良さも自分が大きく育てるべきだ。挫折は自分を育てる転機だろう。言っておくが、お前の将来は間違いなく、これからも多難だ。それでもいい。苦しければ実りも大きいはずだからだ。陽の当たらない高速道路を走るより、陽当たりのよい砂利道を裸足で歩いてゆくような人生を進め。少くくらい血が流れても、その傷みとともに進んでこそ、その先に輝きが見えると信じたい。今が出発点だ。」

「できなくても愛される」ということを、私は十八歳になるまで意識できずにいた。どんな時も親が誇りに思うような子でなければならぬと勝手に思い込んで苦しんだ。しかし、親はうまくできないみじめな私も愛してくれていた。この時になってそれを初めて理解した。一人前に絶望などしていたが、まだ何も始まってはいなかったのか。

自分を好きでいたいと思った。だめな自分も自分だ。失敗もする。それでももがいて努力する自分を誇りに思って、次の一步を踏み出そう。BUMP OF CHICKEN が歌っている。「迷いながら 間違いながら 歩いていく その姿が正しいんだ 君が立つ 地面はほら 360度 すべて道なんだ」と。自分の足下を見てみよう。どこへでも踏み出せる。どこにだって行ける。顔を上げてみれば、少しだけ強くなった自分に出逢えるかもしれない。